

法華コモンズ通信

法華コモンズ仏教学林事務局

192-0051 東京都八王子市元本郷町 1-1-9 善龍寺内 FAX 番号 ⇒ 042-627-7227

ブログ <https://hokke-commons.jp> /メールアドレス hokkecommons@gmail.com

巻頭言

BEとDO

法華コモンズ仏教学林 理事長 西山 茂

何やら英語の勉強のように思えるが、筆者は真面目に日蓮仏教の話を始めようとしているのである。それなのに、何故、BEとDOの話なのか。以下、おいおい、そのわけが分かるであろう。

長年にわたってアフガニスタンの医療と農業開発に尽力してきたベシヤワール会の現地代表の中村哲氏（医師）が十二月四日に撃たれて亡くなったことには、非常に驚かされた。彼はキリスト教徒だったらしいが、現地のことを考えて用水路とともにモスクとマドラサ（イスラーム神学校）を建てたという。つまり、クリスマスチャンの彼は、あえてキリスト教上の「謗法」を犯してでも、現地の人の生活を救おうとしたのであった。

続けて、私は年末（十二月二十三日消印）に福岡県に本部がある佛立講系のHR宗の代表員のN・Nさんから手紙と資料を頂いた。昔、彼が警察官であった頃、署内の武道場に飾ってあった神棚が法制上の「政教分離」に違反し、かつ日蓮仏教上の「謗法」にあたるとして、これに強く抗議したことがあったという。

今回の送付資料によれば、同宗は、十二月二十日に「キリスト教をはじめとする特定宗教の祭事等に関する放送の中止・自粛についてのお願い」を放送各局に送り、クリスマスにまつわるケーキ・サンタ・ツリー・カロール等の放送中止・自粛を求めている。

また、平成十七・二十三・二十八にも、同宗は、「教科書並びに教育現場での宗教的中立性の遵守を要望する請願」などを各地の教育委員会に送り、「宗教的色彩の濃い中学校英語教材」（五種類）の授業での使用禁止と検定の厳格化等を求めているが、注目されるのはその中で「マザーテレサとカトリック・バチカンの問題点」をあげ、N・Nさん独特の表現で、「マザーテレサは食わせ物で胡散臭い人物」とか「バチカンには釈尊を模した像を踏みつけにしているキリスト像があると聞きます」と述べていることである。もちろん、靖国神社への首相の公式参拝や大嘗祭への国費の流用にも、同宗は反対である。

ところで、創価学会の会館のなかには、クリスマス・ツリーがあるものもあると聞く。



「ツリーはただの飾り物で宗教とは関係ないもの」という認識があるのであろう。ついでにいうと、こうした認識のもとに、サンタに代わって靴下のプレゼントを子や孫の枕元に置いた僧侶も沢山いるかも知れない。じつは、そういう私も、サンタの真似こそしないが、ガンジー翁やキング牧師、さらにはマザーテレサや中村医師のような「異教徒」の立派な振舞いを尊敬しているし、訪日時のレストランスコ教皇の言動にもいささか共鳴を感じている者である。

だから、私は必ずしもN・Nさんの意見と同じではない。いや、「異教徒」の立派な生き様まで教条的に「謗法」と断じるやり方には拒否感すらおぼえる。名目上は日蓮門下であつても菩薩行という点では

「異教徒」の立派な振舞いには、はるかに及ばない人はいくらでもいる。私がBEとDOを論ずる所以である。肝心なことは、門下の真剣な菩薩行(DO)なのではあるまいか。ちょうど、当学林では4月から、「現代の法華菩薩道とは何か?」という連続講義を始める。ここでは、門下のDOが深く問われるに違いない。

ところで、門下の教学には、末法の衆生は過去世に下種されなかつた「本末有善」の人なので今度は彼らに有無をいわせずに下種させるべきである(折伏毒鼓)という考え方があつた。つまり、末法において救済されるためには唱題(下種)が欠かせないという立場である。そして、この立場からすると、立派な振舞いの「異教徒」も、宗祖と祈雨を争つた鎌倉期の福祉僧・忍性と同様、十分、折伏毒鼓の対象になるであらう。

振舞いは立派であるけれども唱題していない(下種されていない)彼ら(DOだけの者)は成仏できないけれども、菩薩行もなかつただ口唱しているだけの門下生(BEだけの者)は成仏できると我々は自信を持つていえるのであろうか。一番望ましいのはBEの者が同時にDOの者であることであるが、それも形式化された日本の伝統的な宗教帰属のもとはかなり難しい。そこで想い浮かぶのは、右掲のような立派な振舞いの「異教徒」たちを、「未唱の菩薩」という言葉で呼んだらどうかという考え方である。

もちろん、当学林の狙いはBEとDOが一致した門下生を大量に排出することにあるが、それが叶うまでは多くの「未唱の菩薩」たちの活躍が我々に「はやく立派な菩薩行をせよ!」と迫ってくるに違いない。菩薩行ができない門下生が多くいる限り、妙法や本仏の働きははるかに門下を超えて「未唱の菩薩」にまで及ぶのではあるまいか。(結)

講義報告

法華仏教講座

第一回 戸田日晨 先生 講義

第二回 平島盛龍 先生 講義

第三回 菅原関道 先生 講義

報告 布施 義高

法華 commons の前身である本化ネットワーク研究会では、十一年間に亘る活動の中で、日蓮法華仏教の「再歴史化」を理念として、教団の垣根を超え、毎月一回、開かれた貴重な学びの場を提供していた。そこでは、研修を教学面と実践面とに分け、毎月両者交互に講座を開催し、テーマと講師は毎度、執行部のリクエストに基づいて選定を進め、実に刺激的な研修が執り行われていた。登壇された講師は皆、各分野を代表する学者・研究者や実践者であり、執行部の目利きの良さが光る講師選定に唸らされること屢々であった。

本講座(法華仏教講座)は、その教学面での研鑽のスタイルを当学林で引き継ぎ、平成二九年度から毎年後期(月一回×半年)、毎回、各方面の専門家を講師にお招きして講座を開催させて頂いている。本講座の開設は今年で三年目を迎えることになる。

令和元年度の法華仏教講座は、第一回(十月) 戸田日晨(遠壽院荒行堂傳師、遠壽院総合修法研究所所長)、第二回(十一月) 平島盛龍(興隆学林専門学教授)、第三回(十二月) 菅原関道(興風談所所員)、第四回(令和二年(以下同)一月) 前川健一(創価大学大学院文学研究科教授)、第五回(二月) 澁澤光紀(法華 commons 仏教学林事務局長)、第六回(三月) 西岡芳文(上智大学特任教授)の各先生という陣容である。本年度も毎回、日蓮法華教学や教学史・教団史に関心の高い聴講者のニーズに応えた貴重なテーマが並ぶ。

以下、本原稿執筆時迄に終了した回(第三回の講座まで終了)に限られるが、講座の様子と内容を少しく報告したい。

第一回の戸田日晨先生には、「遠壽院荒行堂鬼子母尊像 孝明天皇親拝」考―幕末期京都御所禁裏出開



平島盛龍 先生

帳とその歴史的意義」の題でご登壇頂いた。宮崎勝美「西海弘通記録」を参照されながら、孝明天皇が京都宮中において親拝されたという遠壽院の荒行堂鬼子母尊神像にまつわること、また、戦中・戦後の遠壽院を舞台とした日蓮宗の歴史や、幕末維新期における表と裏の歴史をご講義頂いた。更に、明治以降の日本と宗教界の状況について触れながら、今後の日本の宗派仏教が広く世界に開かれた方向に進むことの必要性を力説され、傳師としての長年の経験に裏打ちされた重みのあるメッセージに感銘を受けた受講者が多かったようである。



戸田日晨 先生

五（一四六四）の教学に見られる重要概念「一仏二名」について、その思想的なルーツと日隆師の解釈の特色や意義を御講義頂いた。先生は、当時の天台教学の中に日隆師の一仏二名義の論拠があると見られること、けれども、天台宗義では日隆師の一仏二名義の核心である上行↓下種・釈尊↓脱という教主の違による応用の差異を明確に分別するに至っていないこと等を明らかにされた。また、日隆師の一仏二名義が宗祖の『観心本尊抄』への沈潜に基づくことを論証され、その根底には、衆生救済の慈悲心への着眼が存すること等をご教示頂いた。平島先生の鋭い分析力と明快な講義に感心された聴講者が多かった。

更に、第三回の菅原先生には、「日興門流教学の究明序説（一）―日興の師説体得―」の題で御講義頂いた。菅原先生は、日興門流の教学のルーツを白蓮阿闍梨日興師に尋ね、主要日蓮遺文の読解に即して教学上の諸問題にも言及。上行付嘱を重視して本門の妙法を弘通し日蓮を末法教主の上行再誕と拝すること―等に日興師の師説体得と意義をまとめられた。また、講義の中で、実相寺改革に関すること、日興が、佐渡の宗教的窮極の境地に至った日蓮に近侍したこと、始頭本尊の凶顕を目的の当たりにし万年救護本尊を授与されたこと、熱原法難に関すること、宗祖の種脱の見方に関すること、上行自覚公表に関すること、末法の当位即妙・不改本位の名字即成仏論、不軽菩薩の行、曼荼羅本尊―等、それぞれの意義を細論された。真摯な碩学の集大成ともなる貴重な講義に、聴講者一同、引き込まれるように聴き入っていた。

以上、甚だ簡単な報告に過ぎないが、どの回も、講師が各分野を牽引する先生であることから、多くの聴講者が集い、熱気に包まれている。法華仏教研究各分

野の最新の情報や研究成果に触れることのできる本講座の意義の大きさは計り知れないと嘯み締めている。



菅原関道 先生

講義報告

菊地 大樹 先生

歴史から考える仏教④

鎌倉仏教史の名著を読む

報告 西山明仁

菊地大樹先生の連続講座シリーズ「歴史から考える日本仏教」は、2019年後期講座で第四期目を迎えました。前回講座「日本宗教史の名著を読む」に引き続き、今回は焦点を鎌倉仏教に絞り「鎌倉仏教史の名著を読む」のテーマのもと、全六回に渡り鎌倉仏教史の名著を精読していきます。ここで、これまでに行われた三回の講座についてご報告致します。

第1講は「上島亨「鎌倉時代の仏教」を読む」。本論文は岩波講座『日本歴史中世』1の一本として、2013年に執筆された。菊地先生は、中世社会の成立を「藤

原道長の時代」(十世紀後半Ⅱ撰闕期)に見ながら、同時期にスタートして鎌倉時代(十三世紀)にいたる中世仏教の展開を論じ、中世後期への見通しについて述べている、と上島氏独自の視点で中世史をとらえている点を評価。一方で、講座物という性格上もあって、大事な先行研究の見逃しが目立ち、問題点も多いことを指摘されました。

第2講は「家永三郎「日蓮の宗教の成立に関する思想的考察」を読む」。論文の著者家永三郎は、1955年以來のいわゆる一連の「教科書裁判」で有名。本論文は戦後の鎌倉仏教研究の出発点としてその後の研究者に位置づけられた。菊地先生は、内容は斬新であり悪く言えば珍説・奇説。また日蓮遺文が真偽を分別せず引用されており、今日においては日蓮の思想を穿鑿する上で、真偽の判定は重要な要素であるが、この時代は真偽を判別せずに引用するのが普通であり、それを踏まえた上で改めて本論文を捉え直すことが必要である、と指摘。加えて、今回の論文は古典に分類されるが、古典を「古いもの」として一蹴するのではなく、新たな見解や視点が生まれることを期待して批判的に読むことが大切である、とご教示くださいました。

第3講は「平雅行「法然の思想構造とその歴史的位置」を読む」。論文の著者平雅行は、黒田俊雄が提唱した顕密体制論を継承し、それまでの鎌倉新仏教中心史観を批判しながら法然・親鸞研究との接続を図っている。菊地先生は、本論文は河田光夫の法然の善人意識をめぐる論文をきっかけとして、法然の思想を全面的に洗い直してみようと試みたもの。法然の思想構造の位置づけについて、二項対立の立場から論じている、と指摘。質疑応答では日蓮と法然に関することを中心に質問があり、一つ一つの質問に深い知見から丁寧か

つ適切なご回答をいただきました。

これまでの三回の講座のうち、第1講は中世史全体について、第2講、第3講ではそれぞれ日蓮、法然についての名著を精読しました。日蓮・法然は道元・栄西・一遍・親鸞などと共に、いわゆる鎌倉新仏教の祖師であり、近代に於ける日本中世思想研究は、これらの祖師による鎌倉新仏教を中心に見ることが一般的でした。しかし近年の研究では、密教が大きな影響を与えていることが明らかとなり、パラダイムシフトが起きたことは周知の通りです。菊地先生は、鎌倉仏教を含む中世仏教論は、近代思想史を貫通し、さらには日本思想史全体に直結する問題である、と鎌倉仏教史を再検討することの重要性を指摘されました。

毎回豊富な資料をご用意いただき、且つその資料を丁寧に紐解きながら明解なご説明をいただいております。歴史学、思想史学、宗教学など様々な分野に興味のある方、学生の方も多くの示唆をいただけることと思います。菊地先生の深い知見に触れる貴重な機会です。今後の講座に於きましても多くの皆様の聴講をお待ちしております。なお、事前にご連絡頂ければ「事前資料の論文」をお送りしますので、事務局までご連絡くださいますようお願い致します。



菊地大樹 先生

講義報告

これからの天皇制

- 第一回 菅 孝行 先生 講義
- 第二回 原 武史 先生 講義
- 第三回 磯前順一 先生 講義

報告 澁澤 光紀

この特別講座「これからの天皇制」は、当学林の設立理念である「日蓮思想の再歴史化」の試みの一つとして企画されました。再歴史化とは、現代社会の諸課題に取り組み活きた思想として日蓮仏教を蘇生させていくという実践的な営みのことですが、日蓮思想では『立正安国論』にあるように国家と宗教のあり方が重要な課題となります。今回、令和の改元を迎え、天皇制をキーワードにこの「国家と宗教」の問題をあらためて学び考えていく場として開講したのがこの特別講座です。以下、その要約となります。

第一回「天皇制の「これから」をめぐって―その呪縛からの自由」の講師は、評論家で劇作家でもある菅孝行先生。冒頭で「これからの天皇制」を考えることは、日本の国家権威の運命を考えることであり、これまでとは別の「国家の共同性」のあり方を考えることだと述べられて、講義が始まりました。

まず「これまでの天皇制」について、戦前の天皇制は幻想の共同性(支配の正当性を内面化するもの)の役割を担った絶対主義的な神権天皇制だったが、敗戦後の新憲法下では「象徴」となり、権力を喪失したが君主



菅 孝行 先生

制は護持された。この象徴天皇としての存続は米国占領政策の「日本計画」によるもので、今日まで日本が自発的に米国の国益に従属する構造が創り出された。

また天皇が戦争責任を免責されたことで、復員した兵士達にも加害意識の欠如と、訴追しなかった戦勝国アメリカへの親愛感が生じて、加害者意識も被害者意識も持たない「鈍感」な日本人になってしまった。日本は対米従属を国是として繁栄したが今は、米国の凋落により経済的にも軍事的にも米国の国難に奉仕せざるをえない。そして、現政権が米国の国益に寄り添う中で、護憲と民主主義の戦後を守る明仁天皇の発言が多くの国民や左翼陣営からも支持される状況が生まれた。しかし、どれほど良心的な天皇がいても、制度によりガス抜きしか期待できない。「天皇制」とはそうした「制度」であり、天皇が「個人」たりえない「幻想の共同性」である。

そしてまとめとして、こうした幻想の共同性である天皇制に頼ることのない新たな共同性を作るためには、「隣人同士の相互の信認」が不可欠であり、その隣人との相互信認を築くべきところは「労働力と生命が再生産される場」、つまり保育の場や学校や医療機関、障害者・高齢者施設や生活相談の場、DVや貧困からの

避難所などが、新たな共同性を生み出す私たちの「陣地」となる、と提案されて講義を終了しました。

第二回「平成流」とは何だったのかでは、講師の原武史先生が書かれた『平成の終焉―退位と天皇・皇后』（岩波新書）をテキストに、「平成流が創られていく過程」を詳しくお話いただきました。

講義はまず、初めて皇族以外から皇室に嫁ぐことになった正田美智子（現上皇后）との婚約発表（一九五八年）から巻き起った「ミッチーブーム」を見直すことから始まった。その結婚後からスタートした二人の全国地方への旅（行啓）とは、東京でのミッチーブームが時間をおいて地方へと波及していく過程だった。

今までの天皇・皇族の行幸啓は単独がほとんどで、常に夫婦一組となって全国を巡回するのは、明仁・美智子夫妻が初めて。また、自ら跪き相手の目線に合わせて話しかけるスタイルは、美智子皇太子妃が老人ホーム「穂高・安曇寮」で初めて行ったもの。これが、「人々に近づいていく」平成流の始まりだった。

また、地元の青年たちを選抜しての「懇談会」を開き、直接民主主義的な対話を続けたことも、平成流における「会話」の重視だった。この平成流は、一九九一年の雲仙普賢岳の被災地訪問での二人の姿で知れ渡っ



原 武史 先生

た。八〇年代には、昭和天皇の崩御に危機感を持った右派たちが、今も続く「提灯奉迎」という行幸啓を祝う運動を始めたのだが、全国紙報道では被災地での姿が中心で、提灯奉迎はあまり取り上げられなかった。

こうした平成流のルーツとして、正田家と美智子上皇后の「カトリック信仰」があるのではないか。また、昭和天皇が皇太子時代に欧州旅行でベネディクト十五世と会談をした際、法皇から「バチカン（カトリック）」と日本・皇室との相互協力」の話を持ちかけられたとの話もあり、昭和天皇もカトリックに親近感を持っていたのでは、と指摘。最後にポスト平成の行方などもふれて講義を終わられました。

第三回「出雲神話論 祀らざる神の行方」では、磯前先生は講義の冒頭の自己紹介で、現在の興味を「天皇制」「東日本大地震の死者供養」「差別と宗教」として、それらに共通するテーマは「いかに他者と共存できるか」であると語り、講義を三章に分けて話されました。

第一章「神話化する現代日本」では、現代でも安易に神話が活性化する危険性を指摘。特に皇紀二六〇〇年では、その二五年前には常識であった文献学者・津田左右吉の「神代史は官府もしくは宮廷の制作物であって国民の物語では無く」という学説が世論に批判され、著作が発禁処分となった事件を紹介。

また、記紀にある出雲神話の「国譲り」を取り上げ、これは「天津神（伊勢系）」が「国津神（出雲系・土着の神）」の出雲王国を奪い、大国主が冥界に追いやられた物語で、近代でも国家神道形成期に、「天照大神こそが頭幽両界を治める神であり、他の神はすべてその臣下」とされ、伊勢中心になったとのこと。

第二章「まつろわぬ神の行方」では、大国主のような封じ込まれた神の行方を、「異人」「妖怪」「まれびと信



磯前順一 先生

のような「他者の神々」との関係を通してしか自己を確立できない、と指摘。

そして、最後に「謎めいた他者の声を聞く」ことの重要性を述べ、宮沢賢治の作品を読み込んだ詩人・山尾三省の「私は、私を含むよりおおいなるものの呼び声を聴いて、その声とともにただ歩いてゆくばかりである」という言葉を引いて、講義を終了されました。

以上、すでに終了した三つの講義を紹介しましたが、この講座「これからの天皇制」は、終了後に春秋社にて書籍化して、その「発刊記念シンポジウム」を当学林と春秋社との共催で立正大学を会場にお借りして開催する予定です。またご案内致しますので、皆さま、ぜひ楽しみにしてお待ち下さい。

講義報告

『法華経』『法華文句』講義

報告 編集部

平成三〇年四月より始まった菅野博史先生の「『法華経』『法華文句』講座」も、すでに二十二回を数えて、順調な講義が続けられています。菅野先生は本講義を始まるにあたり、次のように述べています。

「『法華文句』は『法華経』の随文釈義の注釈書ですの
で、「注釈書読みの経典知らず」にならないためには、『法華文句』を読むときには、常に『法華経』の本文を
読まなければなりません。現在、『法華文句』の本文を

地道に読む機会はほとんどないと思われるので、この講義では、煩を厭わず、『法華文句』の本文をすべて読んでいく予定です。」

この言葉通り、菅野先生の御講義は本文を実に明解かつ丁寧に読み進めていきます。

そして、テキストの『法華文句』(I)(菅野博史訳註第三文明選書4)は、今年から「釈序品」の終わりとなる巻第二下(一九四頁)に入ったところから始まりま
す。「釈方便品」はこれからですので、受講者はまだ途中からでも十分に講義についていきます。

この「法華文句」講義」の前の午後三時から、「摩訶止観」講義(福神研究所主催)もご講義しています。二つあわせて聴講すると、天台教学の理解がずっと深まりますので、ぜひ「摩訶止観」もご受講ください。

また、平成二八年から二年間ご講義頂いた『法華玄義』は、画期的な現代語訳『法華玄義』(上下二巻)(東哲叢書)として発刊されました。開講日の受付でも頒布していますので、ぜひご購入ください。

受講申込は、7頁の「講座一覧」をご覧頂いて、メールかファックス、または開講日の受付で口頭にてお申し込みください。



菅野博史 先生

仰「謎めいた他者」をキーワードとして考察。祭りとは、崇る霊を祀り上げて封じ込めること(小松和彦)で、祀られない超自然的な存在が「妖怪」、祀られる存在を「神」とする。戦時中に「帝国神道」をとらえた寛勝彦は、「世界の偉人を二神社に合祀し、神道の光明を国家世界に宣揚したい」と提唱したが、それは「国譲り」と同じ支配と服従の関係にほかならない。

日本の神道では、服従することを拒否して殺害されたまつろわぬ神たちも排除されながら包摂される存在として組み込まれる。そこには、西洋的な一神教の宗教を持たない近代日本において、その代替物として大文字の他者の役目を果たす天皇制があり、国家神道は今も存続している。

第3章「祀られざるも神には神の身土がある」(宮沢賢治)では、神社に祀られないような祠の神にもその固有の存在意義がある、と指摘。天皇の身土とは、日本列島のすべてであり、「現人神」となった近代天皇制では、「崇られもする天皇家の脆弱性」を隠すために侵略を続けて、自らの万能性を帝国臣民に証明し続けなければならなかった。

しかし、どんな強大な君主も、自己の力だけで主体化することはできず、天皇という主体もまた、大國主

【法華コモンズ仏教学林 令和2年度前期講座の一覧】

会 場：新宿常円寺「祖師堂地階ホール」新宿区西新宿 7-12-5 寺務所 ☎03 (3371) 1797
受講料：下記の各講座欄をご覧ください。また当日1回のみ受講料は3,000円になります。

一日集中講座「日蓮主義をあらためて問い直す」講師 大谷栄一 先生

6月20日(土) 午後1時30分～5時30分 受講料：5,000円

連続講座「現代の法華菩薩道とは何か」(全5回)

※原則 第3土曜日 午後4時～6時 受講料：10,000円(5回)

- 第1回 政教分離下での「立正安国」—創価学会・公明党と立正佼成会・WCRPの挑戦— … 4月11日
講師：中野 毅 先生
- 第2回 教学の「再歴史化」をめざして—法華コモンズ仏教学林の試み— …… 5月23日
講師：布施 義高 先生
- 第3回 救ライから総合福祉へ—法音寺福祉の法華的基礎— …………… 7月 4日
講師：弓削多一郎 先生
- 第4回 地球温暖化に対する仏教の役割試論—共生論より蘇生論へ— …………… 8月22日
※この4回のみ会場が「日蓮仏教研究所 一階学室」になります 講師：原井 慈鳳 先生
- 第5回 四菩薩行の今日的理解—現代の法華菩薩道としての「四菩薩プロジェクト」— … 9月26日
講師：西山 茂 先生

「歴史から考える日本仏教⑤ 承久の乱から考える鎌倉仏教」講師 菊地大樹 先生

※原則 第3火曜日(7月は第1火曜日) 午後6時30分～8時30分 受講料：10,000円(4回)

- 第1講 院政と承久の乱への道 …………… 4月21日
- 第2講 承久の乱と鎌倉武士 …………… 5月19日
- 第3講 承久の乱と鎌倉仏教 …………… 6月16日
- 第4講 乱後の時代を見わたす …………… 7月 7日

「『法華経』『法華文句』講義」

講師 菅野博史 先生

※原則 第4月曜日(6月、8月は第5月曜日) 午後6時30分～8時30分

- 第1回 4月27日 第2回 5月25日 第3回 6月29日
第4回 7月13日 第5回 8月31日 第6回 9月28日

※ 8月の会場は日蓮仏教研究所一階「学室」になります 受講料：12,000円(6回)

《受講申込み》メールアドレス ⇒ hokkecommons@gmail.com

FAX⇒ 042-627-7227 / ブログ⇒ <https://hokke-commons.jp>

賛助会員一覧（敬称略）

個人会員 ※1口 一万円

- 6口 柴山 信行 2口 間宮 啓壬
- 6口 持田 貫信 2口 菅野 博史
- 6口 小松 正学 1口 佛立研究所
- 6口 松原 勝英 1口 澁澤 光紀
- 6口 中野 顕昭 1口 長谷川正浩
- 3口 西山 英仁 1口 匿名希望
- 3口 竹内 敬雅 1口 匿名希望
- 3口 匿名希望
- 2口 鈴木 正巖

法人会員 ※1口 五万円

- 2口 光巖寺 2口 善龍寺
- 2口 本國寺 2口 持法寺
- 2口 公益財団法人 東洋哲学研究所
- 1口 大久寺
- 1口 摩耶寺
- 1口 天龍寺

（以上）

年間賛助会員加入のお願い

法華コモンズ仏教学林では、本学林の趣旨に賛同して運営の維持に協力して頂ける「年間会員」を

新学期時に募集しています。左記の要領にて、受付けておりますのでぜひご協力のほどお願いいたします。

- 【年間賛助会員 加入申込みについて】
- 個人会員 1年間1口（1万円）
 - 法人・団体会員 1年間1口（5万円）

《お申込み年度の特典》として

- 1、個人会員で6口以上の方には、会員のみ使える年間フリーパス受講証を差し上げます
- 2、法人・団体会員では2口で、誰でも使える年間フリーパス受講証を差し上げます

※「年間フリーパス受講証」は、開設の全ての講座を一年間全て受講することができます。

●申込み頂ける方は、右の内容を書いて、表紙タイトルまたは7頁下記載のメールアドレス、ファックス、ブログからお申し込み下さい。

★個人か法人か、また何口かを明記する。

★名前、年齢、住所、電話、ファックスまたメールアドレスを明記する。

●直接にご加入・ご支援を頂ける方は、郵便振込用紙にて通信欄に口数をご明記の上、左記の口座をご利用ください。

○ 口座名 … 法華コモンズ仏教学林

○ 口座番号 … 0150071 634712

「講座映像版」販売のお知らせ

「講座映像版」第一弾につき、左記の通り第二弾、第三弾が続けて発売されております。

○ 菊地大樹先生 「吾妻鏡」と鎌倉仏教

○ 池上要靖先生 「初期仏教研究」

○ 菊地大樹先生 「歴史から考える日本仏教①」

この講座映像は、次のとおり「ダウンロード版」と「DVD版」の二通りの方法で購入できます。

◎ダウンロード版：価格12,000円（消費税込）

全6回講義の動画ファイルとレジューMPDF

◎DVD版：価格12,500円（消費税・送料込）

全6回講義のDVD6枚組とレジュー印刷物

この詳細につきましては、法華コモンズのブログ（<https://hokke-commons.jp>）をご参照ください。ご購入は、ブログまたは開講時の受付にてお申し込み下さい。

法華コモンズ通信 第4号

○ 発行日 令和2年2月1日

○ 編集発行 法華コモンズ仏教学林

○ 発行所 法華コモンズ仏教学林 事務局

一九二〇〇五一 東京都八王子市元本郷町一―九

【FAX】042(627)7227